

時代を駆ける

時代を駆ける:金子美登／1 有機農業で地域再生

◇YOSHINORI KANEKO

化学肥料や農薬に頼らない有機農業を始めて40年の節目に、日本を根底から揺るがす大災害が起きた。エネルギーや食料自給の問題が問われるいま、金子美登さん(63)は、埼玉県小川町の下里地区を拠点に自身に取り組んできた「有機農業を核としたむらづくり」が、地域再生の一つのモデルになると提唱する。



かねこ・よしのり 1948年3月30日、埼玉県小川町生まれ。約300年続く農家の長男。妻と霜里農場経営。NPO法人「全国有機農業推進協議会」理事長

《支援の第1弾として、植物油(SVO)で走行できるようエンジンを改造した車を被災地の農家に贈ろうと計画する》

震災を機に、エネルギー自給と安全な食への関心は高まる。SVO車は使用済みの天ぷら油などを燃料に活用しているので環境にあまり負荷をかけない。私もSVOの車に乗り、トラクターもこれで走らせる。

国際NGO(非政府組織)の国際有機農業運動連盟(IFOAM、本部・ドイツ)など各国からも救援の申し出が寄せられているので、まずは東京電力の原発事故が起きた福島を中心に支援をしていこうと考えている。

《地震のときは田んぼにいた》

田んぼでジャガイモの植えつけをしていた。これは有機農業の仲間から教わった技術。米をつくる前にジャガイモを3月に植えると、6月中ごろに収穫できる。こういう水田の有効利用がある。しかも田んぼで育てると、病気になりにくく、肌のきれいなジャガイモができる。

このあたりも相当揺れたが、家に帰ってテレビを見たら大変なことになっていた。

《今度の災害は、明治維新や敗戦と同じぐらいの大きな転換をこの国にもたらすと確信する》

被災地の復興の柱は、農業や漁業、林業などの1次産業にある。私ができることは有

機農業のお手伝い。有機農業という言葉は1971年に誕生した。効率化を図り、高く売れる作物を大規模に生産する戦後の近代農業に疑問を抱いた農民や市民、医者、学者らが集まり、日本有機農業研究会が結成されたのが始まりだ。当時23歳の私は最も若いメンバーだった。

私たちのような変わった農業者と一部の消費者が提携するかたちで、日本の有機農業は始まった。

=====

聞き手・明珍美紀 写真・橋本政明／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

1948年3月30日、埼玉県小川町生まれ。約300年続く農家の長男。妻と霜里農場経営。NPO法人「全国有機農業推進協議会」理事長

毎日新聞 2011年5月10日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける:金子美登／2 本物の食を目指したい

◇YOSHINORI KANEKO

《農業を継ぐことに迷いはなかった》

祖父の時代は養蚕と機織り。父は酪農。我が家では乳牛を飼いながら米や野菜を自給していたので、祖母は幼い私を背負いながら「多分、おまえも大きくなったら田植えをやるんだよ」と。そんな感じで育った。

小学生のころから乳搾りの手伝いをしていたから、近所で買うアイスクリームには「おれが搾った牛乳が入っている」とわくわくしていた。

けれども市販の牛乳を飲むと何となく水っぽくて粉っぽい。農業高校に進んで調べると、日本の牛乳には外国から輸入した安い脱脂粉乳や無塩バターを水で溶いたものがあると分かり、食べ物には本物とにせものがあると気づいた。どうせやるなら本物を目指したい。

農業高校を出てから父の手伝いを始めた。けれども同級生だった友人たちは、家業を継がずにどんどん勤め人になっていく。たまたま当時の農林省が東京の多摩市に農業者大学校(現在は茨城県つくば市)をつくと聞き、農業を高い視点から見つめ直したい、同時に家から逃げ出したいという気持ちも半分あって、68年に入学して3年間学んだ。

《有機農業を核とした暮らしを目指そうと決意した一つのきっかけが、欧米の知識人らで結成した「ローマ・クラブ」の「成長の限界」(70年)。日本版は72年に出版された》

人口増加、工業化、資源枯渇、食料不足、環境汚染……。私はこれを読んだとき、鉱物資源や化石燃料に依存した工業化社会は終わりを告げ、農的世界の幕が開くと直感した。農業者である自分は大地に根を張って生きようと。

《在学中には米の減反政策(70年)も開始された》

米が余るからと田んぼに草を生やして補助金がもらえる。でも、そんなことをしていれば、やがて米を輸入する時代が到来する。

乳牛を減らして米や野菜を無農薬、無化学肥料で育て、地元の消費者に届けるようにしたらいいと考えた。水田80アールと畑120アール、主食の米を基本に牛や鶏を飼う「霜里(しもさと)農場」がスタートした。

=====

聞き手・明珍美紀／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町で農場経営。63歳(写真は77年ごろ、収穫した米の脱穀作業をする金子さん。当時は足踏み式の脱穀機だった＝本人提供)

毎日新聞 2011年5月11日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける:金子美登／3 作物の育ち手伝う農業

◇YOSHINORI KANEKO

《農業者大学校(当時東京都多摩市)を卒業した71年は、全国各地で公害問題が表面化した時期。2年後には第1次石油ショックが起きる》

そのころは農薬の空中散布などの問題も指摘され始めていた。安全でおいしい食べ物をつくるには化学肥料や農薬を使用しないこと。太陽と水と土のなかにいる微生物や小動物の力を借りる。落ち葉や牛、鶏が出したふん尿などの有機物を交互に積み込んで発酵させた堆肥(たいひ)を田畑にまく。

《農場には生き物がたくさんいる》

アブラムシがいればそれに比例してテントウムシが増えてアブラムシを食べてくれる。人間から見ての話だが、害虫とそれを食べるカマキリやクモなどの天敵、ただの虫、鳥たちも含めてそれらの生き物がバランスよく田畑にいれば、病気が多発して作物が全滅することはあり得ない。

6月から8月は草との闘いで管理を怠るとたちまち雑草におおわれる。除草剤を使用しないために一度早めに耕し、種まきと植え付けの直前にもう一度耕す。刈り取った草を敷いて雑草を抑えるといった工夫をしている。有機農業は手間がかかるとされているが、私だって機械を使うし、質を落とさない合理化をいつも考えている。

《こうした工夫は実践からあみ出した》

有機農業の仲間と教え合ったり自然に教わったり。例えば農場には300アールの山林もあり、山の広葉樹は秋から冬に葉を落とす。それを小動物が砕き、刻み、さらに微生物、かびや細菌が分解者の役割をして腐葉土がつくられる。

土ができれば設計図は種の中にある。ポイントは有機栽培に適し、その土地にあった品種を見つけること。私たちは種も自家採取していて、仲間との種の交換を大切にしている。

有機農業は、里山の自然が100年で1センチの腐葉土をつくるのを、人間の力で10～20年に早める仕事ではないかと思う。人間は作物が育つのを見守り、ちょっとお手伝い

をする。今回の震災で東京電力の原発事故が起きたが、それは人間の浅はかな知恵で設計図をつくった結果かもしれない。

=====

聞き手・明珍美紀／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町で妻と霜里農場経営。全国有機農業推進協議会理事長。63歳(写真は85年ごろ、堆肥づくりをする金子さん＝本人提供)

毎日新聞 2011年5月12日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける: 金子美登 / 4 消費者と直接提携する

◇YOSHINORI KANEKO

《公害問題や石油ショックを経験し、どんな変化にも対応できる有機農業の「自給区」づくりを試みた》



ニワトリに囲まれる金子美登氏＝埼玉県小川町で2011年4月30日、橋本政明撮影

当初、市場に有機栽培の野菜を持っていても二束三文。高く買われる野菜は工業製品のように色も形もきれいにそろっている。それに比べて有機の野菜は色も淡く、形もふぞろいだった。結局、自分で消費者を探すしかなかった。

初めに設定した消費者の戸数は、米の収穫高で決めた。我が家の田んぼは80アールで、10アール当たり6俵(1俵は60キロ)を収穫できる。年間では48俵。1家族で月平均20キロの米を食べるとして年4俵。そこで10戸となら、地産地消を基本に「自給区」ができると試算した。けれども地元で10戸を見つけるまでに4年かかった。

《当初は月2万7000円の会費制だった》

日本は農業をするのに恵まれている国だと思う。どんな季節でも20種ぐらいの野菜が育つ。旬の野菜と放し飼いの鶏が産んだ卵を週2回、米と小麦粉は月1回届ける。だが、栽培は天候に左右される。多く収穫できたときはいいが、不作のときはどうするかなど難問が持ち上がった。10戸1チームで提携していたので、何か問題が生じると続けるのは難しい。会費制は2年余でつぶれてしまい、収入がほとんどなくなった。農業は強いと思ったのは、こんなときでも食べ物がないという不安がない。

再出発は、1対1で、少し遠方の東京の人にも入ってもらい、「お礼制自給農場」にした。これだけの農産物を贈られたから、これだけ払うという「謝礼」の気持ちで代金を消費者に決めてもらう。「お礼」の幅は十軒十色。私もお金のことで悩まず、農業に打ち込めた。

《土がよくなり、栽培技術も上がって野菜がたくさんとれるようになった。有機農業を始めて10年後の81年には提携先が30戸となり、経営のめどが立つ》

東京に配達に行き、都会で生活する人々との交流ができたおかげで、私たちも刺激を

受けた。基本的な視点は、生産者と消費者の直接提携。お互いの顔と暮らしが見える有機的な人間関係ができるようになった。

=====

聞き手・明珍美紀 写真・橋本政明／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町で妻と霜里農場経営。NPO法人「全国有機農業推進協議会」理事長。63歳(写真は鶏舎で鶏たちに囲まれる金子さん)

毎日新聞 2011年5月13日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける:金子美登／5 全国に仲間と応援者

◇YOSHINORI KANEKO

《農業の考え方を学んだ「日本有機農業研究会」(71年設立)は現在会員が約2500人。代表の故一楽(いちらく)照雄さん(元農林中央金庫理事)ら近代農業に疑問を抱く人々が集まった》

特徴的だったのは(長野県)佐久総合病院の若月俊一先生や、奈良県五條市の開業医だった梁瀬義亮(ぎりょう)先生(いずれも故人)など、地域医療を担うお医者さんが参加されていたこと。梁瀬先生は週のうち3日は医者、3日は有機農業をやりながら世直しを唱えていた。

化学肥料を使うとふかふかのやわらかい土が固くなり、火山性の酸性土壌がさらに酸性化して微生物がいなくなる。病虫害が出て農薬をかけると、それを食べるクモやカマキリなどの天敵も絶滅し、悪循環に陥る。梁瀬先生から直接聞いたこれらの話が、今日につながっている。

《作家の有吉佐和子さんも小説「複合汚染」の取材を兼ねて研究会に顔を出すようになった》

会費制の自給農場が失敗した後のことで「もっと思った通りにやればいいのか」と励ましてくれた。家畜の飼料袋にジャガイモやタマネギなどを詰め、月1回、他の消費者の分と一緒に東京の杉並の自宅まで届けに行った。普段は有吉さんのお母さんが対応してくれたが、ご本人も気さくな人。時折、フランス料理店や自ら演出した芝居に誘ってくれた。

実は私と妻(友子さん)はこの研究会で知り合い、有吉さんは結婚式(79年)にも出席してくれた。当時としては少ない会費制の結婚式で、料理には仲間がつくった野菜やうちの米を使った。

《有吉さんを通じて司馬遼太郎さんとも対談し、内容は「複合汚染その後」に収録された》

司馬さんらによる対談集「土地と日本人」を読んで感銘を受け「ぜひお会いしたい」とお願いした。司馬さんは百科事典のように何でも知っている。田植えが終わったばかりで頭が回らなかった私は自分がいかに未熟で勉強不足かを痛感した。

《研究会にはやはり有機農業の先駆者で山形県高畠町の星寛治(かんじ)さん(75)らもいた》

全国に仲間がいて、それを応援してくれる人がいた。

=====

聞き手・明珍美紀 写真・橋本政明／次回は17日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町生まれ。約300年続く農家の長男。妻と「霜里農場」経営。NPO法人「全国有機農業推進協議会」理事長。63歳

毎日新聞 2011年5月14日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける:金子美登／6 実践と理論で育つ農民

◇YOSHINORI KANEKO

《農業を基礎とした国づくりの現場を見ようと77年の2月から3月にかけて、フランスとスイスの有機農家をめぐる一人旅をした》

日本有機農業研究会の幹事で、反原発やエコロジーの運動で世界の人々と交流していた西尾昇さん(故人)らが農家を紹介してくださった。自分や有機農業のことだけではなく、地元の(埼玉県)小川町や日本の農業についても説明できるよう、それらを記したノートを携えて出発した。

フランスでは西部のアンジェ郊外の酪農家をいくつか訪ねた。乳搾りや農作業を手伝い、汗を流すうちに、飛行機での疲れが抜けて自分の体が普段のペースを取り戻していくのを感じた。

特徴的だったのは、どの農場も自給用の畑があり、余った分は市場などに売りに行く。ある有機農場では、作付けされた野菜を消費者自らが順々に収穫して目方を量り、お金を払っていた。形がふぞろいでもえり好みをしない。

《スイスでは「バイオダイナミック」と呼ばれる農法を実践する農場で研修を受けた。ドイツの思想家、ルドルフ・シュタイナーの理念を取り入れ、畑を取り巻く生態系を重視し、太陽や月、天体と植物との関係も考慮しながら栽培する》

農場はベルンの近郊にあった。日本では考えられないことだが、そこでは馬を連れて山にまきや枝葉を取りに行き、パンが焼け、暖房も兼ねた調理器の燃料に使う。葉は粉碎して堆肥(たいひ)の材料に、馬のふんも発酵材として活用していた。

《欧米の10～30代の若者が10人ほど研修を受け、シュタイナーの哲学書を読みながら農作業を学んでいた》

日本では哲学の本を読みこなし、学び合う農民がいるだろうかと思った。有機農業をしながら理論を学び、また実践する。実践と理論が車の両輪ようになって成長する。理想的な農民像に思われた。



◇かねこ・よしのり 埼玉県小川町生まれ。約300年続く農家の長男。NPO法人「全国有機農業推進協議会」理事長。63歳(写真は4月30日「霜里農場」で)

農民自身が自立する。海に囲まれた日本はなおさら垣根を取り払って交流しなくてはならない。

私の農場でも国内外の研修生を受け入れようと決めたのは、このときだった。

=====

聞き手・明珍美紀 写真・橋本政明／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町生まれ。約300年続く農家の長男。NPO法人「全国有機農業推進協議会」理事長。63歳(写真は4月30日「霜里農場」で)

毎日新聞 2011年5月17日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける:金子美登／7 海外40カ国から研修生

◇YOSHINORI KANEKO

《海外の研修生が予想を超えてやって来た》

提携の戸数が30軒になり、経営が軌道に乗った81年、米国のオレゴン州からトーマス・フォスターという青年が日本各地の有機農家をめぐり、我が家にも滞在した。消費者との直接契約を「カネコさん方式」と呼び、帰国後は、有機農業の生産者団体のリーダーとなって米国の農業法に有機農産物の国定基準をつくる原動力になった。

デンマークからは85年に有機農業の学校を卒業した女性2人が見学に来た。デンマークは冬場は太陽が昇るのが遅く朝は9時ぐらいにならないと明るくならない。子どもたちはライトをつけたスクールバスに乗り、午後3時過ぎから暗くなる。「そういうデンマークが食料は100%を超えて自給している。日本はさんさんと太陽が降り注いでいるのに、自給率が低いのはどういうことですか」と聞かれ、改めて考えさせられた。

《そのころ、アジアからも若者が学びにきた》

最初に研修に来たのはインドの青年2人。以後、フィリピンなど年々増え、「シュガーアイランド」(サトウキビの島)と呼ばれるネグロス島の青年は「飢える子どもたちを何とかしたい」と研修を受けていた。「島では1日1食、山盛りのごはんと塩辛いものにありつけば幸せ」という。農場の野菜や卵で10品目ぐらいの料理を出すと「こうすれば子どもたちに栄養たっぷりの食事を食べさせることができる」と目を輝かせた。

自然農法で知られる故福岡正信さんの農場での研修後に来たタイの男性は、作業の段取りを少し教えるだけで見事にこなす。日本の学生も来ていたが、なにも使いこなせず、「生きるということの原点を教えられていない」とつくづく感じた。

《これまで40カ国の人を訪れた》

有機農業を地球レベルで見れば、先進国は化学肥料や農薬を使い過ぎた反省から、アジアなど途上国はそれらを買うお金がないから有機農業で自給、自立しようとしていた。「いずれはすべての国を回ってみよう」と妻と話している。それぞれが、国の風土や伝統を生かした農業をやっていると思う。

=====

聞き手・明珍美紀／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町生まれ。「霜里農場」経営。63歳(写真は85年、インドからの研修生と田んぼに追肥の鶏ふんをまく＝本人<右>提供)

毎日新聞 2011年5月18日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける: 金子美登／8 有機農業、地元広がる

◇YOSHINORI KANEKO

《新たな目標は有機農業によるまちおこし。そのためには後継者を育てなければならない》

食べ物は誰かがつくらなければならない。農業の後継者を育てたいと79年から、1年間の長期で研修生を預かることにした。この30年で120人以上が巣立ち、そのうちの9割以上が、父親が会社員や公務員など、家業が農家ではない非農家の出身。こういう若者たちが農業の転換の起爆剤になると思う。

《食品加工の地場企業も手を差し伸べてくれるようになった》

米の自由化の話も出始めた87年、(埼玉県)小川町の晴雲酒造が「無農薬米で小川の自然酒をつくりたい」と声をかけてくださった。当時の酒米の買い取り価格は通常1キログラム当たり550円。私たちの有機米は同600円で買ってもらえることになり、勇気を得た。

「この冬から仕込むので40俵(1俵60キロ)ほしい」と言われ、私たちが用意できるのは20俵。そこで山形県高畠町で有機農業を実践する星寛治さん(75)にお願いして、残りの20俵は高畠の無農薬米を調達してもらい88年、一升瓶で1800本の「おがわの自然酒」が売り出された。

《従来の農家も有機に転換し始めた》

有機栽培に取り組む農家には若い研修生が集まり、活気にあふれていた。それを見て、地域のリーダーで私よりも16歳上の先輩が、「地域農業の将来のために、有機栽培の農家と一緒にやろう」と周囲を説得し、私の家を訪ねてくれた。そして01年から、在来種の大豆の有機栽培が始まった。大豆はその後、豆腐工房や豆腐店が買い支えてくれることになった。

30年目にしてこの集落が動いた。本当にうれしかった。

《地元の下里地区で、金子さんの農場だけだった有機農家が集落全体(約30戸)に広がった》

しかも下里地区で栽培する無農薬米は、リフォーム会社の「OKUTA(オクタ)」(本社・さいたま市)が全量、買い取りを決め、昨春から会社が希望する従業員に給与天引きで売っている。

有機農業と地場産業がともに栄えるまちづくりの流れができてきた。

=====

聞き手・明珍美紀 写真・橋本政明／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町生まれ。約300年続く農家の長男。63歳(写真は4月30日、経営する「霜里農場」で研修生らと。中央が金子さん)

毎日新聞 2011年5月19日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける:金子美登／9 エネルギーも自給する

◇YOSHINORI KANEKO

《有機農業での自給に見通しがつき、94年からはバイオマスや太陽光など身近にある資源でエネルギーの自給を試みた》

手始めにバイオガスの生成に取り組んだ。牛2頭のふん尿と台所で流した水などを発酵槽に入れ、微生物の働きによって発酵させる。発生したメタンガスは、湯わかしなどに利用する。また、そのときにできるメタン発酵消化液は液肥として畑や田んぼの追肥に使っている。

トラクターや車は、廃食油を精製したバイオディーゼル燃料に切り替え、3年前からはSVO(ストレート・ベジタブル・オイル)。近くの飲食店や豆腐店などから回収した廃食油を遠心分離機にかけてごみを取り除き、エンジンに熱交換器や油水分離機などの付属品を取り付けてSVO仕様に改造した。

《太陽光は用途も広い》

農場では太陽電池(ソーラーパネル)が活躍し、バッテリーにためた電気を井戸水のくみ上げなどに利用している。農場には牛が4頭いるが、逃げないようにソーラーの電気柵もつくり、中で放し飼いにしている。流れる電気は、初恋の思い出も吹っ飛ばすような強い刺

激。放し飼いの牛はおいしい乳を出してくれる。

新築した母屋にも5年前に太陽電池を設置し、余れば売電している。

《山の資源にも目を向けた》

日本は国土面積の7割は森林なので、それを燃料に使わない手はない。

ちなみに母屋の建材は祖父母が戦前に植林したヒノキとスギ材で建てた。そこにウッドボイラーを導入して床暖房や台所の給湯、温水に利用している。まきを拾いにちょっと山に行って汗をかいてくれば、石油に頼らなくてもほどほどの暮らしができる。

我が家ではライフラインが切れたとしても食、エネルギー、水は手の届くところにある。

《エネルギーの自給が地元にも波及した》

農場がある小川町でも一部の農家が発酵槽を取り付け、メタンガスや液肥に利用するようになった。エネルギーを消費する農業ではなく、エネルギーを生み出す。有機農業は永続する農の世界でもある。

=====

聞き手・明珍美紀 写真・橋本政明／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町生まれ。約300年続く農家の長男。63歳(写真は、発酵槽から得られたメタンガスをコンロに利用する金子さん)

毎日新聞 2011年5月20日 東京朝刊

時代を駆ける

時代を駆ける: 金子美登／10止 土を軸に真の豊かさを

◇YOSHINORI KANEKO

《有機農業を核とした食とエネルギーの自給の取り組みで、地元の埼玉県小川町下里地区が昨年度の「農林水産祭」(農水省など主催)むらづくり部門で天皇杯を受けた》

地区全体が評価され、ともに喜びを分かち合えた。日本の戦後は、家電製品などを海外に輸出して外貨を稼ぎ、農産物を輸入する「外発的発展」だった。私たちが目指したのは、有機農業と地場の産業が互いに協力し、さらに地域の消費者が支えて「内発的発展」をするまちづくりだ。

《次は森林の再生と里山づくり》

戦後の復興の時代、日本は住宅再建のための木材を増やす必要に迫られ、雑木林を切ってスギやヒノキなどの針葉樹を植えた。ところが外国の安い木材が輸入され、手入れのされない山林は太陽の光が入らず、下草も生えなくなった。

今度は国を挙げて戦後の逆をやる。もう一回、その地に生えていた木を山に植える。だから地元では、50年前の里山に戻そうと提案している。手入れされた里山には野鳥が飛び交い、動物たちが集まり、生物の多様性が復活する。

《それは東日本大震災の復興にも共通する》

森がよみがえれば、川の清流を取り戻せる。それが海までつながり生態系が回復する。森にはクリやブナ、イチヨウなど実のなる木も植え、やがてその果実が熟れて、河原の石のようにぽろぽろと落ちるとき、再建の光が見えてくるだろう。

被災地の農家の人々も家や土地を流され、避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされている。でも「いずれ帰るときが来るまで自給して暮らしたい」という人には、国や自治体が耕作放棄地を借り上げて無償で提供するような仕組みをつくるべきだ。私たちは有機農業での自給を応援する。

《そこにある資源で食とエネルギーを自給する地域をつくる。これが若者たちへのメッセージ》

土を軸にして喜怒哀楽がある。手の届くところに食とエネルギーと水がある。こんな豊かなことはない。いま、この国は出直しするとき。その土台は、いのちがめぐる農業、里山の文化だと思う。＝金子さんの項おわり

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

聞き手・明珍美紀(写真も)／24日から、在宅緩和ケアの医師、岡部健さん

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■人物略歴

◇かねこ・よしのり

埼玉県小川町生まれ。妻友子さんと霜里農場経営。NPO法人
全国有機農業推進協議会理事長。63歳(写真は17日、同農場で
金子夫妻)

毎日新聞 2011年5月21日 東京朝刊